

教師の教え中心の教育から子供の主体的な学び中心の教育へと転換が求められ、子供自身が自らの見方・考え方を生かして、実生活や社会の問題を発見・探究する力の育成が重視されている。この指導を適切・的確に行うためには、教師自身が社会や自然等々の見方・考え方を広げ、深める必要がある。

本書は教師の見方・考え方を多角的に鍛えるのに良きテキストとなる。

著者は、社会問題を見つけ研究するとは、「自分が問うたこと、知りたいことを徹底的に調べ、証拠を挙げつつ筋道立てて推論し、人を納得させる作業」だという。これは子供の探究的な学びに重なる。どのような見方・考え方で研究するのだろうか。

著者は労働経済学、経済思想、経済史の分野での大先輩だが、論点はそこだけではない。自然科学、歴史、地理、政治、宗教等々の多彩な角度から、研究結果や事例を基に論述する。

経済社会の学び方 健全な懐疑の目を養う



猪木武徳 著
946円 中公新書
0120-29-9625

そして、学び方としての方法論、すなわち「問う」ことの重要性、見えなものの観察の方法、文書資料の価値の判断（「現地性」と同時性）、数字の重要性と限界、さらに社会研究と自然研究の方法の違い分け等々を示す。これらは子供の指導の基本となることでもあり、改めて確認しておきたい。その後、社会研究における理論の功罪、因果推論との向き合い方、曖昧な心理の理論化、歴史に学ぶ意義と注意点をなどを多彩に論じる。間違いなく視野が広がる。

副題にある「健全な懐疑の目を養う」とは、著者が示す多角的な視点から適切な方法で社会を見て問うことと受け止めた。子供の健全な懐疑の目を養うことを大切にしたい。

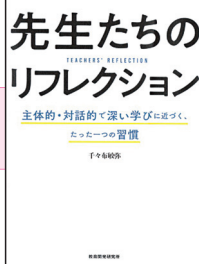
（教育調査研究所・寺崎千秋）



「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、教師はどのようにリフレクション（内省）すべきか。子どもを全てコントロールしようと考える教師が、グループの作り方から考え方、発言の仕方まで指導するが、子どもは動かない。本書は、授業研究を中心に、このような教師の信念を変えるための戦略を論ずる。

著者は言う。都道府県教育委員会の施策の主たる考案者の指導主事には、他県の教育センターの研究成果を、許可なしに引用することはできないという価値観（迷信）が流布している。

また、学習指導要領をいかに解釈するかという姿勢で研究が進められることについては、儒教の訓詁（くんこ）学に似ているとも述べる。訓詁学は經典の語句の意味を解釈するものとし



先生たちのリフレクション 主体的・対話的で深い学びに 近づく、たった一つの習慣

ちくちく 布敏弥 著
2200円 教育開発研究所
03-3815-7041

て出されたが、その解釈が形骸化し、さらには国民の信託を得た議員や、その中から任命された省庁の幹部からトップダウン的に新しい施策が示されるため、行政官による説明が効を奏さない場面が増えているというのだ。評者は考える。政策決定において下の者は「前例踏襲」となりがちなのだが、上の者は新規に着任した途端、目新しい、あるいは目新しく見える施策を立てたがる。それが教育界に混乱を引き起こしているのではないかと。著者はトップダウン的に示された施策を演繹的思考で「周知・徹底」しようとする教育関係者が増え、実践研究もその手段と化す現状を懸念している。評者も、そこでの「政治案件」による影響、偏り、変質と、「訓詁学的」研究の限界が相まって、中教審の求める「授業研究」が現実的な教育施策に結実しない状況が生じていると考える。

（前聖徳大学教授・西村美東士）